

第25卷 1号 令和5年9月

ISSN 1345-0204  
Vol.25 No.1 Sep 2023

# 日本災害看護学会誌

Journal of Japan Society of Disaster Nursing

---

第25回 年次大会 講演集

---

日災看学誌

JSDN



一般社団法人日本災害看護学会

Journal of Japan Society of Disaster Nursing

一般社団法人 日本災害看護学会  
第25回年次大会

## 実践共同体で育てる災害看護の底力

大会長  
大野 かおり  
兵庫県立大学

会 場 アクリエひめじ(姫路市文化コンベンションセンター)  
会 期 2023年9月2日(土)・3日(日)

主催事務局

兵庫県立大学 看護学部  
〒673-8588 兵庫県明石市北王子町13-71

運営事務局

有限会社あゆみコーポレーション  
〒550-0001 大阪府大阪市西区土佐堀1丁目4番8号 日栄ビル703A  
TEL : 06-6131-6605 FAX : 06-6441-2055  
E-mail : jsdn25@a-youme.jp

## O10-1

## 厳冬期災害時の避難所における「かまくらトイレ」の使用感の検証

○本多いづみ(ほんだ いづみ)<sup>1)</sup>、堤 晴季<sup>2)</sup>、鬼塚美玲<sup>3)</sup>、  
福田大年<sup>4)</sup>、齊藤雅也<sup>4)</sup>

札幌市立大学大学院 看護学研究科 博士前期課程<sup>1)</sup>、札幌市立大学  
大学院 デザイン研究科 博士前期課程<sup>2)</sup>、札幌市立大学大学院  
看護学研究科<sup>3)</sup>、札幌市立大学大学院 デザイン研究科<sup>4)</sup>

【目的】わが国の約5割は豪雪・特別豪雪地帯であり、厳冬期災害を想定した備えが不可欠である。厳冬期災害では、ライフライン途絶の長期化や雪に伴う交通障害などにより、既存トイレや非常用トイレを使用できない可能性が高く、避難所ではトイレの確保困難がより深刻化することが想定される。看護職は避難所管理責任者と連携し、トイレの衛生管理体制を整備する役割が求められるため、トイレ確保に向けた方策の検討が必要である。そこで、避難所におけるトイレ確保の一策として、豪雪地帯の現有資源である雪を利用した「かまくらトイレ」の活用を考案した。本研究ではかまくらトイレを実際に製作し、避難所で一般的に使用される屋外仮設トイレとの比較により、かまくらトイレの使用感を調査し、厳冬期災害時の避難所におけるかまくらトイレの活用可能性を明らかにすることを目的とした。

【方法】調査期間は2023年2月10日～2月13日、研究対象者はA大学の学生および教職員36名とした。かまくらは除雪のために集められていた雪山を利用し、研究者3名で作成した。成人男性が立てる高さ、介助者が同時に入れる広さ、倒壊を防げる外壁の厚さ、初心者数人が1日で作成できる大きさを考慮し、外寸は高さ2500mm、横幅5000mm、奥行3500mm程度、内寸は高さ1750mm、横幅2100mm、奥行1800mm程度とした。かまくら内に洋式の災害簡易トイレを設置し、入口はビニールカーテンで覆い、雪壁の一部を削ってトイレットペーパーやランタンを置くための棚を作成した。データ収集は無記名自記式質問紙調査法を用いた。調査票はトイレ体験後(実際の排泄なし)に直接配布し、回収箱で回収した。調査項目は属性2項目、かまくらトイレの使用感(選択式、11項目)、かまくらトイレに対する意見(自由記述)の計14項目とした。データ分析では記述統計の算出と質的帰納的分析を行った。

【倫理的配慮】札幌市立大学デザイン研究科倫理審査会の承認を得た。研究対象者に研究概要、自由意思の尊重、個人情報保護、生じうる負担とそれらを最小化する対策について文書で説明した。

【結果】研究対象者は男性13名(36%)、女性23名(64%)であった。かまくらトイレの使用感のうち、トイレ内の広さは「広い」34名(94%)、「狭い」2名(6%)であった。トイレ内の明るさは「明るい」24名(67%)、「どちらとも言えない」7名(19%)、「暗い」5名(14%)であった。トイレ内の音は「小さい」27名(75%)、「どちらとも言えない」8名(22%)、「大きい」1名(3%)であった。羞恥心は「感じる」22名(61%)、「感じない」14名(39%)であった。防犯性は「低い」31名(86%)、「どちらとも言えない」3名(8%)、「高い」2名(6%)であった。自由記載では、肯定的意見として「広くて快適に使用できる」「衣類の着脱が容易」「易清掃性がある」「段差がなく滑る心配がない」等が抽出された。否定的意見として「天井が低く狭さを感じる」「広くて不安を感じる」「外に音が聞こえそう」「入口のカーテンの隙間が気になる」「鍵がないことに不安を感じる」等が抽出された。

【考察】かまくらトイレ内の広さや音、排泄時の更衣のしやすさ等、使用感に対する肯定的意見が多く、厳冬期災害時の避難所におけるかまくらトイレの活用可能性が示唆された。しかし、入口の仕様に関連した防犯性への不安や羞恥心等の否定的意見があり、改善の必要性が示された。防犯性の低いトイレは利用の妨げや性犯罪に繋がるため、安心して利用できる仕様が求められる。今後は、災害時に入手可能な資材の活用という条件を考慮しながら、防犯性を高める方策を検討したい。

## O10-2

## 被災地に派遣された看護職者に対して組織が行った支援に関する文献レビュー

○前川志保(まえかわ しほ)<sup>1)</sup>、渡邊智恵<sup>2)</sup>  
福岡徳洲会病院<sup>1)</sup>、日本赤十字広島看護大学<sup>2)</sup>

【目的】本研究は、被災地に派遣された看護職者に対して組織が行った支援について文献レビューを行い、派遣前・派遣中・派遣後の時系列でまとめ明らかにすることである。

【方法】研究デザインは文献レビューである。検索式を「被災地 or 災害」and「派遣」and「看護」として全年検索を行った。包括基準を設け76件の文献を抽出した。次に、除外基準を設け29件の文献を選出し、ハンドリサーチにより3件の文献を加え、最終的に32件を対象文献とした。分析方法は、発行年、文献種別、災害種別、組織、看護職者の派遣時期に関するデータを抽出し、分類と整理を行った。次に、被災地に派遣された看護職者に対して組織が行った支援に関する記述部分を抽出してコード化し、派遣前・派遣中・派遣後に分けて整理し、サブカテゴリー、カテゴリー化を行った。

【倫理的配慮】対象文献は一般に公開されているものを用い、出典を明示した。また、著者の表現や記述に改変を加えず、著者の意図する意味を損なわない様に留意した。

【結果】文献の発行年は、全て2005年以降の文献であった。文献種別は、原著論文18件、実践報告13件、その他1件であった。災害種別は、地震災害28件、不詳4件であった。組織は、医療機関14件、次いで保健機関7件であった。看護職者の派遣時期は、発災～1か月以内が10件と最多であった。被災地に派遣された看護職者に対して組織が行った支援は、派遣前10カテゴリー、派遣中6カテゴリー、派遣後5カテゴリーに分類した。派遣前は、＜派遣者が現地で安全に活動できるよう準備＞＜組織として派遣者と派遣者の職場を応援＞＜被災地の概要に応じた活動指針の提示＞＜本人の意向や能力等を考慮して派遣者を選出＞などであった。派遣中は、＜派遣期間中の生活環境の整備＞＜派遣者の活動状況を職員に共有＞＜現地での活動内容や被災状況に関する情報共有＞などであった。派遣後は、＜派遣者の経験を振り返る機会の設定＞＜組織からの社会的評価と慰労＞などであった。

【考察】派遣前・派遣中・派遣後のカテゴリーを時系列で整理した。その結果、全期間を通じて行われていた支援は、派遣者と派遣チームへの支援と職員全体への支援であった。派遣前・派遣中に行われていた支援は、派遣先での活動への支援であった。派遣前だけの支援は人選に関する支援であった。派遣者と派遣チームへの支援は、被災地での身体的な安全確保に加え、心理社会的な安全保障を考慮した支援であると推察された。職員全体への支援は、職員全体に派遣活動への理解や関心を高め、組織全体の一体感を生んでいると考えられ、派遣者に起こり得る多様な問題の予防に繋がっていると推察された。派遣先での活動への支援は、派遣前の活動計画や準備が被災地の状況に則さないといった事態が起こり得ることから、派遣中にも情報提供や活動状況の共有にて支援していると推察された。人選に関する支援は、看護活動ができないことによる不全感や望まない人選による不満感等を考へての支援であると推察された。

【結論】被災地に派遣された看護職者に対して組織が行った支援は、派遣者と派遣チームへの支援、職員全体への支援、派遣先での活動への支援、人選に関する支援であった。派遣者と派遣チームの安全確保や安全保障を考慮した支援を行うことが、派遣者に起こり得る多様な問題の予防に繋がることが示唆された。本研究は、日本赤十字広島看護大学大学院修士課程の課題研究の一部である。